

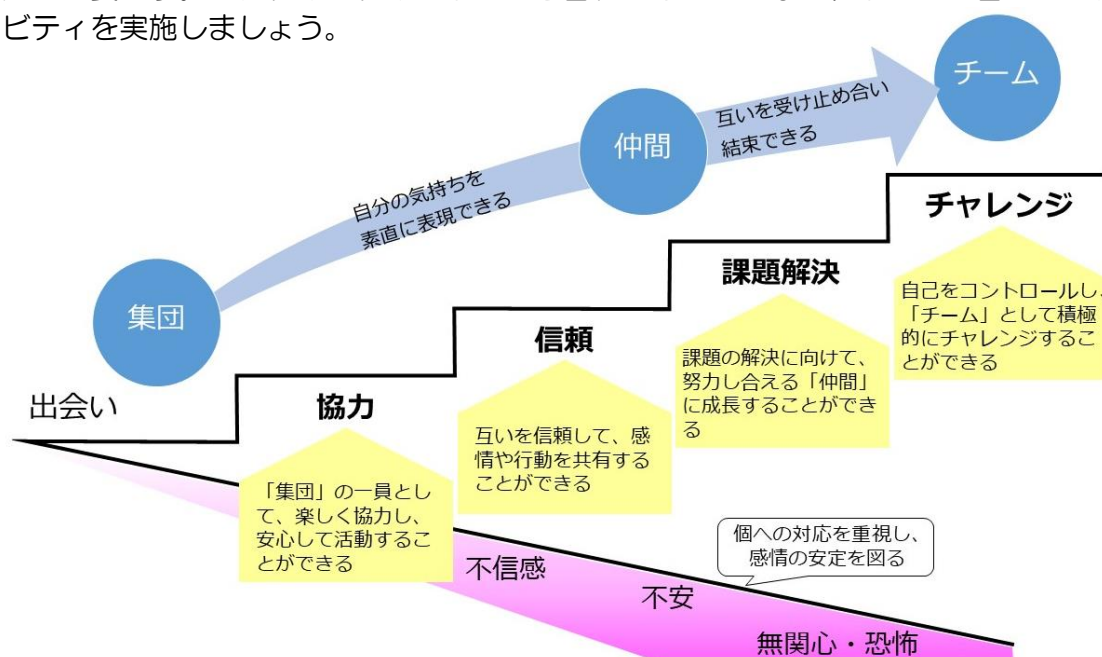
3 実施にあたって

「学びのサイクル」を大切にしましょう

AFPYでは、目標設定から始まり、「体験学習サイクル」に沿って活動を展開していくことが大切です（「AFPYの基本的な流れ」参照）。体験のやりっ放しではなく、活動に意味付けをし、学びを生活に生かすことができるようにしましょう。

集団の発達過程を意識しましょう

初めて出会った同士のメンバーに課題解決的な活動を与えても、なかなかうまくいきません。集団の発達過程を考え、心と体をほぐす活動であるアイスブレイクから入るなどの工夫が必要です。アクティビティに子どもを合わせるのではなく、子どもに合ったアクティビティを実施しましょう。



活動の過程を大切にしましょう

アクティビティを実施するとき陥りやすいのが、「課題が解決できたか、できなかったか」という活動の結果に目を向けてしまうことです。アクティビティを実施することが目的ではなく、アクティビティの中で個人やグループに起こっているできごとに目を向け、その様子を活動中や活動後の振り返りに生かしたいものです。課題が解決できなかった場合にも、活動の中には学びがあります。成功体験、達成感を味わわせることが全てではありません。

また、アクティビティは次のように分類できます。しかし、一つのアクティビティでも、展開の仕方によって違った活動になることがあります。

知り合うための活動：	互いに知り合い、楽しみながら親しい関係を築く
緊張をほぐすための活動：	苦手、恥ずかしいと感じても、失敗を恐れずに積極的に行動するようになる
意思疎通を図るための活動：	互いに意見や感情を的確に伝え合えるようになる
信頼関係を確認する活動：	仲間といることで自分は守られていると実感する
課題解決のための活動：	効果的にコミュニケーションをとって協力し合う経験をする

指導者が自ら体験した上で取り組みましょう

アクティビティとなりうる活動が紹介されている書籍や資料はたくさんあります。それらを参考に組み合わせてみることも可能です。

しかし、それぞれの活動の実施について細かい注意事項や多くのバリエーションがあります。また、授業と同じように、目標や内容が同じでも、指導者の個性によって微妙に流れや効果が変わります。

指導者が実際に体験し、自分と集団の変容を感じることで、実際に指導するときに、どのような場面で、どのような支援をするか、その支援の仕方、タイミングを学ぶことができます。

様々な研修機会に参加し、ぜひ体験してみてください。「百聞は一体験に如かず！」です。

継続して取り組みましょう

AFPYは、一時的な対処法や解決策を求める魔法の活動ではありません。継続して活動していく中で、子どもたち自身が個人と集団の変容や成長を感じる事が大切です。特別な取組としてではなく、開発的生徒指導の手段の一つとして、実践を積み重ねていけるとよいでしょう。一つのアクティビティを何度も繰り返し行うことでも、十分な効果を得ることができます。

子どもたちの気づきを大切にしましょう

「一方的に教え込まれる」と「自分で気付くこと」。どちらの学びが生きた力として働くでしょうか。

AFPYでは、指導者は、子どもたちに教え込むのではなく、暗喩（メタファー）が含まれるアクティビティを使って、子どもたち自身の気づきを引き出していくことが大切です。

「仲良くしようね」と指導者が伝えるのではなく、「仲良くしたいな」「仲良くすることは気持ちの良いことだ」と子どもたちが気付くような仕掛けが求められます。

また、発言を強制することは控えましょう。沈黙の間、子どもたちの頭の中では、様々な思いがめぐっています。指導者は、その思いを引き出すきっかけとなるような、活動中の子どもたちの言動を把握しておく必要があります。

「仕掛けて待つ」。この姿勢を指導者はもちたいものです。

「振り返り」を大切にしましょう

「振り返り」というと「ここが良くなかった」というマイナスの部分にスポットを当てることが多くありませんか？

AFPYでの「振り返り」は、「子どもの動き」「言葉のやりとり」「仲間との関わり」などの過程に目を向けて、

- ・今グループで何が起きているのか
- ・日常において同じことが起きていないか

などに、子どもたち自身が気付くように導くことが大切です。振り返りは、話し合いだけでなく、絵にしたり、モデルを作ったり、図形や写真に表したりと様々な表現方法があります。

指導者の「説話」だけで振り返りの活動が終わることは避けたいものです。